



只見短歌会 令和五年一月詠草

若き等にまじりて老ゆる足かばひデイサービスの一日過ごしぬ
馬場 八智

縫糸をささくれの指でこ繕りても眼鏡なしでは通るはずなし
目黒 富子

コロナ禍もありて娘も孫も来ぬ互ひの無事を願ひ年越す
関谷登美子

記録的豪雪のこと東京の友より届く「大丈夫かい？」
立花 奏音

同居せる九十の従姉洗濯は私の仕事と洗ひくるるも
新国由紀子

眼鏡かけ見えるだけでもいいんだよと言葉しづかに眼科医話す
渡部ヨリ子

ひとつ事にこだわり過ぎし雨の日の明けたる朝の唇をはがす
新国 洋子

(出詠順)



只見俳句会 一月定例会

日高俊平太 指導

冬紅葉まわり一面雪野原
白虎隊の雪笠のごと杉木立
真理子

冬枯や小さき虫の命あり
大雪にネコ帰りつきほつとする
睦子

水のめば白鳥いよよ真っ白に
思い立ち餅つきにゆくすくと立ち
紺青

只見湖に映す寝釈迦や春近し
採血の腕あずけいて雪催
恒夫

煤焼けの「マル」や串魚年用意
一服の吐息やふつと雪空へ
礼

そばがきや十年味噌の寒の入り
「の」の字逆六才児書く火の用心
一穂

通学児わざわざ氷踏みもして
シャーペン芯折れたり十二月
修一

箱根路につなぐ襷や冬の海
廃屋に凜と咲く口ウバイあり
信

一階の間明るき冬の夜
すっぽりと野山を包む寒波きて
都

